

『義経磐石伝』と先行史書

倉 員 正 江

閣に束ねたるを。いつしか此國の言はに還して六に冊りて。

文化三年に刊行された都賀庭鐘の遺作に『義経磐石伝』なる読本がある。本書の出版事情については、中村幸彦氏が指摘したとおり、『大阪出版書籍目録』には天明三年十二月十二日にすでに出版許可になっている。この間の事情は、板元河内屋八兵衛（文うる翁文貫）の序文に

……うし（＝庭鐘）下世のうちに其事載てむなしうはたちはかりのとしをへたり。今やとりかなくあつまよりをしてるなにはのふみやまで、小説めきたるものゝ本を梓にもさくらにもえりて鐫るときにあひたるニ、さはかり名高うおはせりしうしの遺書をあたに函底に秘めをくへき事かはと……

とある点、また天明乙巳（五年）の春の海の一釣子（＝庭鐘）の跋に、

……其初ハ漢筆の這個那個の俚言を用ひ。且下段を見よなどゝありしを。貝呂道人転得しぬれと。其俚言に堪ず。久しく雑

とある点から察すると、初めは中国白話文による演義体で義経を主人公とする作品を計画したことは中村氏の指摘のとおりであろう。結局計画は変更されて和文のまま残ったものを、読本の流行に乗じて文化三年になって刊行した、というわけである。庭鐘は天明三年の時点ですでに、『英草紙』『繁野話』を刊行しており、初期読本史上画期的な役割を演じたことは言うまでもない。これに『秀句冊』（天明元年刊）を加えた三部作と異なり、一応義経一代記という長編小説であることが本書が注目される理由でもある。また作中のいたるところで庭鐘の史観が吐露されている。そこで、庭鐘がこうした作品を生み出すに至った背景を考えると、当然のことながら、『三国志演義』や『忠義水滸伝』といった中国の演義体小説の盛行が浮かんできると。しかしここでもう一つ、日本の通俗軍書といったジャンルも考えてみなくてはならないと思うのである。従来の研究史から全くと言ってよい程看過されて

いた分野であるが、源平合戦時代を扱ったものや、義経一代記物も刊行されており、庭鐘が意識しなかったはずはないと考える。以上の点を考慮しながら『義経磐石伝』（以下『磐石伝』と略す）の性格を再考してみたい。

二

『磐石伝』には長文の跋文が付してあり、庭鐘の小説観を示すものとして注目されている。庭鐘は和漢の小説批評を述べてから、

…往にしますら雄の。いさほしありてうつもれたるを發明せるわざは。忠なる人のかざしなるへきか。此御国の中ころは。史ならぬ桑門隠逸の己々が心の向ふにまかせ。私の筆添たるもおゝし。基虚ほめを抑へ冤屈を伸しなむ作業は。古人も心さす所ありし。…

という。こうした小説を「史之余」とする見解は、当時庭鐘に独自のものでは決してなかったことはすでに指摘されているし、歴史上不遇であった人物を顕賞する、といった小説観はやはり中国白説小説や演劇の影響であるとも言う。それらが『磐石伝』においていかに具象化されているかを考察するためには各章ごとの梗概を、やや長くなるが示す。本文の部分のみにし、評の部分は省略する。

卷之一

○常磐鏡石に子を祈る。麟児を単閼に育する事

源義家は九条院の腰婢であった愛妾常磐を紫竹の別荘に住まわ

せていた。常磐は近くの鏡石に祈ると、男児三人を産む。

○寶石叟難婦を護送す。細幻龍門に駁る事

平治三年十二月四日平治の乱起こる。常磐母子は近くに住む壳石叟に救われ字田の龍門の莊の大和太郎何某といういとこのもとへと着く。

○難婦自己像を造る。将雛各綱籠を脱る事

常磐は母が捕えられたと聞き自首する決心をし、義朝と自分の人形を造り遺品として大和太郎に託す。結局常磐は清盛に許され、三人の子は成人の後僧とするとされた。

卷之二

○常磐主を換て事る。藤源氏混姓の雑談ある事

常磐は子供たちのため仕方なく清盛の意に従う。清盛刺髪の後は大倉卿に嫁す。牛若は鞍馬山に入るが、壳石叟の助言で奥州秀衡の所へ下る。常磐これを知って悲嘆する。

○晋の羊后兩國に皇后と為る事

中国の晋の羊后が子を連れて劉曜に再嫁する話が搜入される。

○入内の賀使私に語る。常磐立后より御産まで参りし事

仁安三年高倉帝即位。承安元年清盛息女(得子)入内する。常磐はこれより六波羅に出仕する。内田二郎が賀使として上洛し、六波羅繁榮の様子を見る。高倉帝は小督に思いを寄せていたこともあったが、やがて得子は妊娠、治承二年出産する。これが安徳天皇である。清盛は治承五年に病没する。

卷之三

○頼政桑道を責る。義経参陣頼朝を翼る事

治承四年源頼政が以仁王の令旨を諸国の源氏に伝え決起するも敗北。寿永二年義経入京する。以後各地で源平合戦が続くも、義経の活躍めざましく、平氏は壇ノ浦にて全滅、安徳天皇も入水する。

④先の太后剃髪幽棲す。六道物語虚妄といふ評

女院（＝得子）太原に幽棲し、法皇が文治二年行幸する。義経はすでに行方知れずとなっていた。盜賊が横行して庵を襲うが、尼が判官の声色をまねて賊を払う。賊は下河辺庄司行平等に討たれる。女院は貞応三年六十八歳にて死ぬ。

⑤平族歌道に深き評あり。源三義経の冤を断する事

義経と弁慶が、平家の武将が多く和歌に巧みであったのは、武人としてははめたことではないと話し合う。川越重頼が加わり、逆鱗の話となる。義経と得子密通の噂は事実には非ずと江田源三は弁護する。

卷之四

⑥義経都に在判する。畠山梶原気性異なる事

義経伊予守となり六条室町に住す。畠山重忠は義経宅を訪れ、劍二腰を武衛（頼朝）と御所（義経）に献ずとして諷諫すると、義経も兄弟の順を犯すことなしと誓う。また景時も義経宅にて新田冠者義重が頼朝の気嫌を損じた事情を話すが義経は不快に思う。

⑦弁慶後乗を勉む。賣石叟正純を捕る事

頼朝から義経暗殺を命じられた土佐坊昌俊は七大寺詣を口実に上洛する。この噂を知って義経は弁慶に命じて昌俊を招く。昌

俊は起請文を認めて敵意のないことを誓う。しかしその夜義経の館を急襲するが、義経の愛妾静の機転で奮戦し、ついに昌俊は敗走するも鞍馬山で出家した売石叟に捕えられ、義経のもとに差出され斬られる。義経は行家とともに都を出て西国へ下る。文治元年のことであった。

⑧漢の韓信大功有て讒言を被し事

漢の武將韓信は貴家の出身ながら蕭何に認められて大將にまでなるが、劉邦（漢の高祖）に助力したにもかかわらず謀反の罪を着せられ殺された事件は、義経の一件に類似している。

卷之五上

⑨陽に大洲の波に赴き。隠て吉野の雪に埋る事

西国で挙兵した義経・行家一行は、近国の武士達の支持を得るため苦戦していた。摂津大洲の浦より出船した一行は大風にて遭難、離散する。静は天王寺辺まで送り返すとし義経一行は吉野山へ潜伏するが露見。忠臣忠信は義経の身替りとなるべく一人残留し奮戦する。

⑩西行奇に忠信を扶け。布裙隊に尤物を認る事

戦い疲れた忠信は西行法師に助けられる。静は義経と別れるが、蔵王堂にて僧に見つかり都へ送られる。更に鎌倉に送られて義経のことを尋問され、神前で舞を所望される。妊娠していた静は義経の子を産むが男児のため捨てられた。後に母と讃岐に幽棲する。

卷五之下

⑪有綱戦て判官の憤を吐く。大石辟て判官を救ふ事

行家は和泉国に隠れるも奇襲を受け死す。有綱も義経を弁護しながら奮闘し、敗走して自害する。忠信も女に裏切られ討たれる。義経も危機にさらされるが、例の紫野の鏡石開けて洞中に入る。そこで再び売石叟に会い地仙脱尸の法を教えらるる。

卷六之上

④賣石叟保て関を脱る。判官奥に入り。秀衡没後の事

義経一行奥州へ向う決心をする。売石叟も助力を申出で同行する。安宅の関も無事越える。しかし秀衡没後息子泰衡は義経を急襲し、衣河にて自殺させる。義経の首は鎌倉に送られたが、中には義経の生脱を信じる者もいて、義経・弁慶の贋者が横行したりした。頼朝の奥州征伐があり泰衡も敗死した。

⑤小柴の客店に同志語る。判官志を得て赤光を視す事

西国路山崎の宿の旅店小柴で主人と客が語らう。実は伊勢三郎と畠山重忠の老党小山五郎であった。二人は北山の鏡石に至り、三筋の赤気が立つを見て、海尊の示したとおり、義経が鞍轡国にて志を得た事を悟る。

卷六之下

⑥楮造の像に怪あり岩塚に鎮す。義経宋国に至て胡王となる事

卜部の三太なる者龍門の大蔵寺にある常磐の作った張子の像を拝す。三太の夢中に常磐が現われ自らの行為を弁するもそれは狸の怪であった。像は土中に埋められる。一方義経は蝦夷へ渡り空太島から金の本国北山鞍轡に渡ってこれを責め元を破り清和国を建てる。義経すでに八十余歳となっていた。

以上のような内容に「草史氏曰」「神史氏曰」「情史氏曰」「余評に曰」、あるいは「一説に」「或説に」等で始まる本文より一段下げの評が付され、かなり長いものもある。これについては、徳田武氏が「司馬遷の『史記』の論贊の様式を採用したもので、『史記』は「正史であるのに対し、『磐石伝』は異端の史書、野乗として著わされた」と言う。今それに異論があるわけではないが、この作品を近世における義経一代記物の系譜の中で考えてみるとどうなるか考察してみる。

義経一代記といえはまず『義経記』がある。庭鐘自身、

義経記ハ文章よく筆にまかせてはづミたる物にて。しかも古き草紙なり。堀川夜うちの弁慶がたはふれ。関こゆる道中の名をつくしたる。詞も古雅に物かたりの体にて。見ずバをしき草紙なり。いかに肝要の軍功。一の谷八島を記せざる。元へしるしたるを。琵琶法師にゆづりてのぞきたるとやいふ。鎌倉にて静の舞の段へ。文章展て。後の人の書得べきにハあらず。『磐石伝』卷之三④

と激賞しているのであるが、何といっても「詞も古雅に物かたりの体」という点が、庭鐘の言う「演義体」とは相容れない面があったと見るべきであらう。庭鐘が『磐石伝』の評中で引用している書の主なものとして『東鑑』『保元物語』『平治物語』『源平盛衰記』等がある。源平合戦を素材とした作品を書く以上、これらは最も基本的な資料となるし、当然参照したと思われる。が、こ

れらだけでは不充分であらう。そもそも近世における義経一代記はいかなる性格を有するのか。これについては島津久基氏が名著『義経伝説と文学』の中で、

…江戸時代の義経物中にはこの『義経記』から直接の系統を引く一代記風物の一群がある。その代表は『義経興廢記』と『義経勲功記』とで、共に『義経記』の系統のものではあるけれども、『盛衰記』『太平記』風の編述態度でそれらにも遠く及ばない、所謂實録體小説といふべき作、文學に於ては殆ど言ふに足りないものである。…

と規定した。しかしこれらの作品群を吟味すると、全てが『義経記』から直接の系統を引く」と言い得るかの疑問が出てくる。近世に成立した最初の義経一代記物は何かと言うと、その時期を明確にし難いが、やはり『異本義経記』(写本)であろうと考えている。本書は志田元氏が翻刻、紹介し、さらに章段目次を施し、略注を付した高橋貞一氏の翻刻がある。ちなみに島津氏は本書を直接見ていないとのことである。体裁は上下二巻二冊で内容は巻上が「義朝子女」から「壇浦合戦・義経景時不和」まで(高橋氏の目次による)、巻下が「義経鎌倉下向」から「義経首葬」(同)まで、すでに義経蝦夷渡海説を載せる。本書は『異本義経記』とは言うものの、文献学用語の「異本」ではなく、別の書である。高橋氏は解説で、

義経記の如き文藝的な性格は少く、各注にも示した如く、吾妻鏡と一致する所が少くない。この點は吾妻鏡によりて構成されたものと認められよう。…(略)…義経の蝦夷が島へ渡った

という傳説も注目すべきものである。⁽¹⁰⁾ 義経の奥州下向について、義経記の如き創作的なものがなく、安宅傳説もないことは、本書の編者が史實に忠實ならんとしてとりあげなかったものであらうか。…

とした。本書の成立時期については志田氏が「延宝年間から宝永年間」とし、高橋氏は単に「江戸初期のもの」としている。ここにもう一つ写本で流布した『義経知緒記』なる義経一代記があり、『異本義経記』と関連させてその成立を考えなくてはいいけない書である。本書の成立時期については島津氏が、『義経記評判』に「傳に曰く」「傳記に曰く」として引用してある文とはば同一の内容を持つため、その刊年である元禄十六年以前の成立とされた。『異本義経記』と『知緒記』の内容を比較すると、文章に至るまで酷似しており一方が一方を増補改訂したもの、あるいは抄出したものと考えられよう。ただここで疑問が残るのは、『謡曲拾葉抄』(寛保元年序、明和九年刊)巻十二「安宅」の項に、『異本義経記』云…として引用された文が、実は『異本義経記』にはなくて、『知緒記』にあるという点である。とすれば『知緒記』は『異本義経記』の別名と考えるべきか。事実島津氏の指摘のとおり『異本義経記』引用の書は『謡曲拾葉抄』の他にも『山城名勝志』(正徳元年刊)等いくつかあるが、私の管見の範囲では『知緒記』名で引用した書は見当らない。『知緒記』の名称ではあまり知られていなかったと考えられようか。内容としては『知緒記』の方が豊富で、特に「鬼一法眼」の項で『異本義経記』にはない「張良伝」を兵法伝授という関連から長々と載せ、また弁慶

に關する話も多い。寛文九年の蝦夷一揆の首謀者シャクシャインを義経の末裔とする風聞も『知緒記』にのみある。ここでこの二書の成立時期を考えてみると、同じく『丹後海陸巡遊日録』を引用しているところから、同書成立の延宝五年以降、また前述の如く『義経記評判』刊行の元禄十六年以前、ということになろうか。両書とも、本文に「伝に曰く」「或は曰く」といった形式の注を付すという近世に多出する通俗軍書の型を備えている。『義経記』とはまた違った性格を持つ義経一代記が写本で流布していた点は注目してよいと思う。

なお島津氏の挙げた『義経興廃記』（元禄十七年刊）であるが、本書は義経入夷説を採らず高館で死亡させているという近世の小説類の中では珍らしい例である。これはむしろ『義経記』を比較的忠実に祖述した類で、その点では後述の『義経勲功記』とは性格を異にする。故にここでは詳述しない。

四

次に『義経勲功記』について考察してみる。本書は正徳二年の刊行で、近世最大の軍書作家馬場信意の手になる。『和漢軍書要覧』（明和七年刊）に

巻首ニ残夢問答アリ。此書ニハ義経主従奥州ニテ自殺セズ、常陸坊ガ仙術ニテ蝦夷ガ島ニ渡リ、弁慶ガ素性并ニ北国落ナド大ニ異ナリ。

と評された。冒頭の「残夢問答」は正しくは「夢伯問答」で睡椅子安達東伯なる人物が、常陸坊海存（＝残夢仙人）と会談し、そ

の談話を綴って刊行すべく友人馬場信意に与えたのが本書である、という設定になっている。常陸坊海尊なる人物は史実も不明確なのに加え、『義経記』でもさして活躍しないばかりか衣川合戦に先立ち失踪する。この程度の一僧兵が近世には残夢なる長生の奇僧と結び付き伝説的に大いに発展したことは周知の如くである。この説を全面的に利用したのが『勲功記』であった。海尊は『異本義経記』においてすでに

：義経も兼々心得給ひて、文治四年の頃より、常陸房海尊を蝦夷へ遣はし、日頃彼の島の者共を愛付け給へり。

というような役割を荷うようになるが、その傾向は『勲功記』においてより顕著なものとなる。『勲功記』は巻一の「源氏繁栄附典既君達事」二「常盤感靈夢附牛若丸誕生同鎌倉鶴岡五大堂牛奇瑞事」から始まり、巻十九の六「勾当八秀実攻落泉屋並義経渡海蝦夷事」で終わる。義経を大威徳明王の申し子とし、最後は衣川を遁れて蝦夷に渡海しその棟梁となる、という一代記であるが、いかなる点に庭鐘の『磐石伝』との共通性が認められるかを述べてみたい。

一つは先に指摘した海尊の活躍が挙げられよう。『勲功記』では巻一の五「牛若殿出奔東山附常陸坊海存由緒事」に早くも登場し、ここでは初め心了坊と名乗り源氏の再興を計る人物である。牛若丸に会って出家しないで奥州の秀衡を頼るべきことを説得するという重要な役割を果たす。『磐石伝』では「売石叟」なる男がこれと同じような役割を演じている。中村氏の指摘のとおりこの「売石叟」の名は『堪忍記』巻四から採ったと思われるが、『磬」

石伝』巻上の十六で、義経一行が京都を避けて奥州へ向うくだり

で 然る所に家内に水汲ミ掃除する剃髪のをとこ。此席に出て。

愚も御法に具せられ候へといふ。あれも目なれぬに。弁慶能認へて。是石賣し男の剃髪せしなり。

と登場し一行に加わるのだが、そこで弁慶が、

貴殿を日立坊と呼べし。月日立ては思はず来るのいはれなり。人法諱を問はば。海尊とこたへ給へといふ。

ここで初めて売石叟が義経となるのである。すでに『磐石伝』巻五下の十五で売石叟が義経に「是天仙の人間にかくれ遊ぶ常法。地仙脱尸の工夫」を教授するの、海尊から仙人のイメージを得ての創作であろう。『磐石伝』でも最後海尊は義経とともに異国に渡り、

此渡宋の大概へ。南朝の将。彼常陸坊が由来ある奥の古寺に得て傳り、當初は真にかくの如く私記を秘したれと事実去て後は、公明に人にも語り傳へたりと斯のごとく聞畢ぬ。

として終わる。そして評の部分で、庭鐘は

常陸坊が因縁の寺は。風土記に会津の地にあるよししかゝる事を傳へたるや否へしらす。其人仙籍に入へき異跡にてあるらめ。義経を襁褓より扶助することへ奇偶の一談なり。

と言う。海尊が「義経を襁褓より扶助」していた、などという事は『勲功記』を読まずしては出てこないと思われる。庭鐘自身が「全編の賣石叟ハ。眠りを覚すの打諱にて。」(巻六上の二七評)とした売石叟は『磐石伝』の狂言回し的存在であるが、それは

『勲功記』の海尊の役割からヒントを得ていると思われる。

二に義経観についてである。義経といえ何と言っても「判官鼻眞」の語が思い出され、徳川初期にはすでにこの語が常識化していたとは島津氏の指摘である。氏は前掲書において、

然るに傳説に於ては、次第に義経の缺點短所は辯護補足せられ、或は削除し去られ、長所は益々發達せしめられて、義経は漸次理想化、完全化して行った。

とする。確かに演劇の世界ではその傾向が強いのだが、文学においては必ずしもそうではないように思われる。『勲功記』はその例で、牛若丸誕生の時点で作者は、

是只義経其身ノ智勇ニ慢ジ。舎兄頼朝卿ヲ輕ンジ玉ヒ。逆意ヲ挿ミ玉ヒシユヘ。天理ニ逆ヒテ。明王ノ加護ニモ叶ハザリシニコソト。

と言う。庭鐘も『磐石伝』最終章の評に、

判官壮年の豪氣に任せ。隱徳冥加を損したる事あらば。神仙も幸することあたはず。一将功成りて万骨枯の習なれども。と言ひ、最後に、

看官。人我の上に工夫を加へて。中恕の衝に止まらば。大なる過ち無かるべしと。稗史氏謹で言す。

と言って終わる。両者とも決して無条件に義経の武勇を頌賞してゐるとは言えず、『判官鼻眞』の思想に貫かれた書とは言えまい。ただこの「判官鼻眞」的心情が単に庶民の側だけでなく、知識人の間にさえ根強かったことは以下の例からも察せられる。すなわち、義経について言及している当時の代表的史書を見てみると、

新井白石は『読史余論』の中で、⁽¹²⁾

ある人おもへらく、義経終に頼朝にそむきたり、さらば頼朝のかれを誅せむとせし事、ことほりともいふべしといふ。しかるにはあらず。義経、はじめより頼朝に二心なし(略)……かくまでに頼朝がために心を尽しぬれど、頼朝さらによしと思ふ心もなく(略)……義経が院宣を申し請し事、やむ事を得ざるにしたり。その志のごときはあはれむべし。

と言ひ、「おもふに、たゞ頼朝がごときものゝ弟たらむ事、最難しとこそいふべけれ。」と結ぶ。また、安積澹泊は『大日本史賛』⁽¹³⁾の中で、

賛に曰く、源義経は、神機の武略あり、智勇兼ね備はる。奇を出して勝を制すること、韓・白と雖も、以て過ぐる無し。

……(略)……頼朝の奸雄なる、天下に揚言するに其の(注)義経首を獲たるを以てすれば、則ち以て人心を鎮圧するに足る。

……(略)……今に至るまで、夷人、義経を崇奉し、祀りて之を神とす。之を情理に揆るに、其れ或は然らん。

とまで言った。両者の共通点は、その好悪さをもつて頼朝に点が辛く、それにはまった義経を悼むという見解である。これらに比較すれば『磐石伝』の義経観が当時としては『勲功記』のそれに近いことが理解されると思う。

その他細かい点での類似も指摘できる。土佐坊昌俊が敗走して鞍馬山に逃げるが僧正が谷で貧僧(＝実は禿石曼)に捕われ再び義経のもとに差出される、という『磐石伝』の記述は、『勲功記』で、樺林坊寛日が昌俊を捕えることになっているところから採っ

たと思われる。『吾妻鏡』(文治元年十月)では鞍馬の奥で数日後義経の家人が昌俊を捕えたとあり、『勲功記』はこれから創作したと思われる。しかし『義経記』や謡曲「正尊」幸若「堀河夜討」では、これと異なり当日弁慶が昌俊を捕える勇猛な働きを見せることになっている。これを考えても、『磐石伝』の内容が『勲功記』よりヒントを得た一例となろう。

『勲功記』が前出の『知緒記』を書名を明記せず引用していることは島津氏の指摘のとおりである。『勲功記』は基本的には『吾妻鏡』『盛衰記』等の当時としては正史に近いと思われる書に依拠して著述されており、不明な点の多い牛若丸時代と末路に關しては創作を多く加味して仕立てられている。この点にも『磐石伝』の方法と通じるものが認められよう。

五

『磐石伝』が『勲功記』を意識したと思われる点が少なくないことを述べたが、庭鐘が参照した書は稀代の読書家として知られる彼のことであるから他にもある。卷二の四で、源の多と藤原舒峯という二夫に見えた饒の忠奥の女子の話が引用されるが、これは、評に「多氣窓螢の記に見えたり」とあるように、伊勢国司北畠材親作の『多氣窓螢』という伊勢にまつわる古い説話を集めた書の下巻「あゝ愛染の事」が古典である。またこれは書名を出してはいないが、卷三の七で、伊勢平氏の安濃の造桑道が頼政の愛妾を奪う話も、同書下巻「頼政が使のこと」から採ったと思われる。このように写本で流布した書からも材を得ている。なお巻

二の五に見える羊后の話は『晋書』三一「后妃上」にある「惠羊皇后」に依つたものであらう。

以上の先行史書を考慮した上で、いかなる点に『磬石伝』の個性を認めるべきであらうか。確かに庭鐘自身が、「末二段ハ餘話にて年数しるすべからず」と言うように、最後の二章は完全な創作であり、その他細部にも庭鐘の創作と思われる箇所はいくつかある。たとえば巻五上の十四で、負傷した忠信が金峯山中で西行法師門位に助けられること、巻六上の十六で安宅の関の一件が出るが、「勸進帳読み」のような弁慶の活躍はなく、義経に四十男の扮装をさせて関守の目をこまかすという海尊の知恵で関を抜けること、などであるが、いずれもその場の一趣向にすぎない。総じて冒頭から奥州征伐まで、『吾妻鏡』から『勲功記』に至る先行史書の内容を大胆に潤色したような変化はさして認められないと言えよう。そこに鏡石の奇跡や常磐作の人形の怪をからませて長編の体裁を整えたとも言える。

むしろ庭鐘が演義小説が陥りがちであった欠点——史実を叙するに拘泥して文章が平板になり易いこと——を意識し、章によって文章に変化を持たせるべく意図したことを指摘しておきたい。たとえば巻二の六で、妊娠した得子の「つれ／＼のまきるゝかたなきを慰め奉らんと、女房たち草紙つくりて奉る。おのれ／＼が心よせ殊にして一にならぬこそをかし。」という場面、巻三の八で、建礼門院が大原に幽棲し、「此庵室もやゝ住居定りけれバ。絶て音せざる古き女房ども。都にあるも。ひなの遠きも。とふらひまうで来りむかしがたりす。」という場面、そして庭鐘自身評で、

「又吉野別れの一段ハ。義経記に生別の情をつくして。後の筆者多くかたどれり。」といった巻五上の十四の場面などである。全体に白話語彙をも駆使し漢語が目立つ文章の中で、このように女性に關係する部分にはかな表記を多用した典雅な趣きのある文章で綴られているのは注目すべきである。中国の演義小説が文語調の格調高い場面と、口語を生かした現実味あふれる場面を書きわけていることは周知の事実であるが、庭鐘もこれと同じような効果を狙つたものであらう。

六

庭鐘の義経論という点で、『磬石伝』と比較しなくてはならぬものに『英草子』（寛延二年刊）第三卷第五話「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」（以下「紀任重」と略す。）がある。本編の原拠が『古今小説』「闇陰司司馬貌断獄」であることは知られている。翻案と原拠を詳細に対比させた三宅正彦氏の論があり、参考になる。庭鐘は原拠の韓信を義経に、劉を頼朝に対照させているのだが、これは『磬石伝』巻四の十二に同じである。ここに「淮陰侯韓信は楚の淮陰の人なり。……（略）……高祖孫が軍より来て。信が死を聞て一たびは喜び。一たびハ憐む。」として記された韓信の伝記は、『史記』九二「淮陰侯列伝」と『前漢書』三四「韓信」の記載を合わせたような内容であるが、庭鐘はあくまで「韓信実に返逆せず」とする立場で、「今義経の身の上も是に類して憐なり」とする。庭鐘によれば韓信失脚の原因は、一つには「只吾ハ漢に功あれば。漢我に負じと思ひ究めて。君能を忌とば

かり思ひて疑は「なかった点、もう一つは韓信自身が言う「吾闕通が計を用ず、兒女子の為に詐らる」点である」としている。結局自分の置かれた立場を冷静に察知し得なかった点に起因すると言えよう。これを義経の場合も同様であると考えるなら、この点にも庭鐘の単なる「判官墨貞」とは異なる見識が認められよう。

また三宅氏は、「紀任重」中の義経が、その不道德性によって断罪される点に注目され、その思想的背景を指摘している。しかし義経の罪科として吉岡鬼一法眼の挙げる四点のうち、最初の淨瑠璃姫との恋愛は『磐石伝』本文には出て来ない。こうした伝説味の濃厚なものは総じて採られていないのである。次に建礼門院を犯したという噂については『磐石伝』では江田源三と常磐の兩人によって二度も否定させている。以下、兄頼頼を追討しようとした点、大量の殺戮を犯した点も、それが原因で義経が「陰徳を損」じたとは『磐石伝』には書いていない。つまりこれら四点は話に諧謔味を出すための趣向で、そこにはさして深い意味を求める必要はないのではなからうか。

七

『磐石伝』の跋文の小説批評の中で、庭鐘は

三国の人品ハ既に人の耳に有て其聲聞改かたく作意展かねたり

とした。しかし『磐石伝』もつまるところこの傾向から脱し得ない点があった。巻二の六は一章のうちに、清盛一族の栄華から、清盛の死までを述べようとするため、先行史書のいくつかを組み

合わせ要約したにすぎない感を与える。巻五上の十四で静の死までを記しているのも同様である。しかし中国にも、

読三国、勝読西遊記。西遊捏造妖魔之事誕而不経。不若三国実叙帝王之事、真而可考也。……

とか、

読三国、勝読水滸伝。水滸文字之真、雖較勝西遊之幻、然無中生有、任意起滅。其匠心不難。終不若三国叙一定之事、無容改易、而卒能匠心之為難也。……（毛宗崗『三国志演義』卷首「読法」）

とする小説観があった。つまりある程度正史に照らし得る面が多い方をよしとするわけである。庭鐘もこうした見解をとったものであろうか。故に、創作が加わっているとはいえ叙事にとらわれがちな通俗軍書の域から大きく飛躍することを困難にしたいと思われる。

日本における本格的な演義小説の登場は、やはり馬琴を待たなくてはならなかった。しかし庭鐘の試みの意義を考えると、それに刺激を与えた通俗軍書の盛行も忘れてはならないことをここに強調するものである。

注(1) 「都賀庭鐘伝攷」(『中村幸彦著述集』十一所収 昭和五十七年 中央公論社)

(2) 『義経磐石伝』の引用は国会図書館蔵本による

(3) 「読本初期の小説観」(『中村幸彦著述集』一所収 昭和五十七年)

(4) 注(3)に同じ

- (5) 「読本と中国文学」徳田武氏(『読本の世界—江戸と上方』所収 昭和六十年 世界思想社)
- (6) 「読本論」徳田武氏(『鑑賞日本古典文学』三五「秋成・馬琴」所収 昭和五十二年 角川書店)
- (7) 昭和十年初版、昭和五十二年再版 大学堂書店 以下島津氏の説は本書よりの引用
- (8) 『伝承文学研究』四・五 昭和三十八年・三十九年
- (9) 『仏教大学研究紀要』五十七 昭和四十八年
- (10) 拙稿「近世における義経伝説の展開—入夷伝説の再検討」(『近世文芸研究と評論』二十九 昭和六十年)に義経入夷説を記す書の表を付したが、本書を漏らした。ここに補足する。
- (11) 注(1)に同じ
- (12) 引用は『日本思想大系』三五「新井白石」(昭和五十年 岩波書店)による。
- (13) 引用は同四八「近世史論集」(昭和四十九年 岩波書店)による。
- (14) 材親は永正八年四十四歳にて没す。所見本は東京大学国文学研究室蔵本居文庫本。永正七年材親の奥書あり。
- (15) 「初期読本作家・都賀庭鐘の思想—「紀任重陰司に至り滞獄を断ぐる話」の分析をつうじて—」(『大阪城南女子短期大学研究紀要』一 昭和四十一年)
- (16) 「韓信の失脚—全相續前漢書平話から西漢通俗演義まで—」(橋本堯氏『日本中国學會報』二十二(昭和四十五年)によれば、韓信が謀反を起こしたとみるかどうかは諸作品中でも二説に分かれる。

新刊紹介

雲英末雄編著

『絵入俳書集』

絵俳書とは、明暦二年季吟著『いなご』に端を発し、以降俳諧と絵の結合が緊密になり、享保期には墨一色描ながらかなりの出版数を誇り、次第に彩色化され、様々な趣向が凝らされていく絵入の俳書をいう。

本書では、元禄期を代表する『俳諧吐綴難』(秋風編)、享保期彩色さし絵(破笠画)の嚆矢で初世市川団十郎二十七回忌追

善句集『父の恩』(二世団十郎〈俳号三升〉編、宝暦期刊の江戸座俳人清水超波十七回忌追善集『わかな』(玉蛾・桑世編、一蜂・龍水画、『はせを』と合せて一部)の三書を影印、解説を付す。

著者の解説は厳密・深切。その博識広見は言うまでもない。本書は、雅趣を解し、俳書を愛惜する編著者のすみすみまでゆきとどいたところによって、魅った絵入俳書集の白眉である。俳諧と画の渾然悠々たる詩的別乾坤が、ここに在る。

なお、『俳諧隠者三井秋風』(『元禄京都俳壇研究』所収)等も併せ読まれたい。

(昭61・2 日本古典文学影印叢刊31へ貴重本刊行会) A5判 三九四頁 一一〇〇〇円) [玉城司]

『国文学研究』では、会員の皆様の著作の紹介につとめております。著書を刊行されました際には、是非一部ご寄贈下さいますようお願い申し上げます。